
脱出

エイプリル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

脱出

【Nコード】

N8946A

【作者名】

エイプリル

【あらすじ】

タイムリミットまではあと五分。少年は月に一度の楽しみのために授業からの脱出を試みます。果たして、タイムリミットまでに目的を遂行できるのか？

「…………あと五分」

机にとつぷしたまま、右手首の腕時計で時間を確認した。

（いつもの調子だと。このままじゃ、余裕で時間オーバーだ）

英語担当教師の岡田は、教卓の前で黒板に長々と英文を書き続けている。

間違いなく本日最後の問題だろう。…………しかし、時間が足りない。
この問題を答え終わった頃には、とうに売り切れだろう。
残された道はただ一つ。

脱出だ。

幸いな事に僕の席は一番後ろの窓際だ。

これほど、気づきにくい席はないだろう。

おまけに近くの席は身長の高い生徒に囲まれていて、先生からは僕を確認するのは至難の技だ。

これまで三回に一度は捕まってしまったが、まだ岡田には、試した

ことがないので多分大丈夫だろう。

そんな自分勝手な事を考えながら、準備を始めた。

机の上に教科書を開いた状態で立て、準備完了。

気付かれないようにイスを少しだけ下げ、その隙間から床へ移動。

ほふく前進で、目的のドアまで慎重に進んだ。

ドアまであと机二つ分だ。僕は残り時間を確認した。

「……三分弱か」

ぎりぎりだ。早いクラスはそろそろ授業が終わってしまう。

しかし、最後の詰めを誤ってしまつては、意味がない。

慎重に慎重を重ね、ようやくドアの前に辿り着いた。

（よし。ちゃんと人一人分開いてるな）

空気の循環のために、両端の窓と前後の出入り口は、少しだけ開くように学校で決められていた。

夏は涼しくていいのだが、冬は死ぬほど寒いから夏だけにしろと、ほとんどの生徒から苦情を受けていた。（実は先生もいるらしい）

まあ、そのおかげで僕の脱出も可能な訳だ。

ちなみに今は夏だ。

だから入口は少しだけ広く開いている。

ドアから首だけ出して、廊下に非授業の先生がいないかどうか窺う。
いないと分かった、素早く廊下に飛び出た。

そのまま階段めがけて、低い姿勢で走り抜けた。

階段を飛び降りて、一気に一階へ、降りた反動を利用して一気に加速。三つ目の教室に飛び込んだ。

「……………あれ？」

キンコンカーンコン。授業終了を告げるチャイムが鳴った。

丁度その時、僕は呆然としていた。

(……………)

腕時計に目をやった。

12時25分。やっぱり昼休みの時間だ。

でも、シャッターは閉まっている。

「き、きつと遅れてるだけさ……………」

希望を抱きながら、しばらく待つて見たが、シャッターが開くことはなかった。

重い足取りで、教室に戻ってきた僕は、窓際の自分の席に崩れ落ちた。

「何もかもおしまいだ。何がいけなかったんだ。脱出だつてうまくいったのにさ……」

僕はぐだぐだと泣き言を言いながら頭を抱えていた。

「ど、どうした。そんな夢も希望も捨てたような顔して……」

僕の悲痛な表情を見て、少しひいている、前の席の佐藤が話しかけてきた。

「何か辛いことでもあったのか？俺に出来ることがあるなら話してみろよ。力になるぜ」

佐藤の言葉に胸をうたれた僕は、全てを佐藤にぶつけた。

「……そうか。それは残念だったな。しかし、まあ……よく聞け。ひろし。お前は一つ重大な間違いをしているぜ……」

「それは明日の昼休みだ」

「朝のホームルームで購買部は休みだつて、放送が流れただろ？…

…、その様子だと聞いてなかったみたいだな。って！」

「ふ、ふふふ、ふふふふふ……。はははははははは！」

予想外の歓喜で肩を震わせて、不気味な笑いが止まらない。

それを見ている佐藤は今にも逃げ出しそうな雰囲気をかもしだしている。

僕はそんな佐藤の手を握った。

「これで、一ヶ月生き抜ける可能性がほんの少しだけ増えたよ。ありがとう。本当にありがとう」

佐藤の手を握ってぶんぶん振り回した。

「……ああ。よかったな」

佐藤は僕の顔を見ないように、横を向きながら空返事をした。

僕にそんな些細なことは、もはやどうでもよかった。僕の中ではどこからともなくファンファーレが鳴り響いていた。

「俺、ちょっと便所行ってくるから、手離してくんね？」

「……ん。あつ、悪い悪い。忘れてたよ」

僕は佐藤の手を解放した。すぐに佐藤は席を立ち去った。

「明日かぁ。明日こそは必ず手に入れて見せる。今日は早く寝て、

明日にそなえねば！」

「っと。いい忘れてたぜ。岡田が戻ってきたら教員室に來いってよ」
佐藤は振り向かず僕に言いはなった。

「……え」

背筋に寒気が走った。

（まさか……バレたのか僕の脱出は完璧だったはずだ。物音一つた
てずに教室から抜け出し。

細心の注意で階段を滑り降り。

誰よりも速く購買部の教室に入った。

見られてるわけない。

見られていたとしても、後ろ姿だけで僕だと分かるわけがない。

分かるわけないんだ！）

そんな自己分析をしながら、教員室へ向かっていた。

コンコン。

「失礼します。岡田先生いらっしゃいますか？」

決まり挨拶をして教員室に入った。

重々しい足取りで、一番奥の窓側の教卓に近付いていく。

そこに僕を呼び寄せた張本人が座っている。

これから僕は一世一代の嘘をつかなければならない。

何の準備もしていないがやるしかない。これを失敗したら、間違いなく停学ものだ。

明日学校に行くために、そして、僕の命大事な月一限定パンを食すためにも……

（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございました。
よろしければ、感想やアドバイスお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8946a/>

脱出

2010年11月26日12時40分発行